HEPATOLOGY NEWS
肝胆膵病態内科学ニュース
第6号　2009年7月　発行

医局員紹介

河田　則文
(かわだ　のりふみ)

平成21年度を迎えました。新しい研修医が病棟で緊張した面持ちで働いている様子が清々しさを与えています。平成20年度に大阪市立大学医学部附属病院は厚生労働省ならびに大阪府より肝疾患診療連携拠点病院としての認定を受け、肝臓病患者さんに対する相談窓口を開設しました。市民公開講座など啓蒙活動を活発化させるとともに、肝臓病教室をリニューアルして最新の医療情報を伝えるアットホームな場を設けています。また、肝臓病に関する研究を活性化する機会として、厚生労働省や日本学術振興会などから外部資金を獲得し、南館に立ち上げたラボでは細胞や動物を用いた実験、肝臓病に関係する分子生物学的解析を行っています。治療法が目覚ましい進歩を遂げているウイルス性肝炎は勿論のことですが、脂肪性肝炎、自己免疫性肝炎、薬物性肝炎と人体最大の工場である臓器の障害は留まることはなく、細胞が壊れそして再生する仕組み、それが繰り返されて線維化や肝硬変が生じて肝癌へ移行するメカニズムはまだまだわからないことばかりです。さらには、肝臓癌や最近増えている膵臓癌や胆管癌に対してどう対処し、今年新しく登場してくる抗癌剤の治療効果を検討するなど、当科に関連する研究テーマは尽きることがありません。知的好奇心を持つ熱い研究者が集い、世界へ向けた情報発信基地として成長を続けたいと思っております。

また、本年の年末には私の研究の「肝（キモ）」である肝類洞壁細胞研究会を大阪で開催できることを楽しみにしています。

大阪市立大学大学院医学研究科
肝胆膵病態内科学　教授
大阪市立大学医学部附属病院
肝胆膵内科　部長
大阪市立大学医学部附属病院
中央部門　輸血部　部長

日本内科学会地方会評議員
日本消化器病学会評議員
日本消化器病学会近畿地区地方会評議員
日本肝臓学会評議員
日本肝臓学会西部会評議員
International Society for Hepatic Sinusoidal Research (ISHSR)
Council Member (2009 ～)

日本内科学会専門医
日本消化器病学会専門医・指導医
日本肝臓学会専門医・指導医
日本臨床薬理学会特別指導医

大阪市生活習慣病検診委員会委員（2008 ～）
大阪府肝炎肝がん対策委員会委員（2008 ～）
都道府県肝疾患診療連携拠点病院間
連絡協議会委員（2008 ～）
大阪府肝疾患診療連携拠点病院責任医師（2008 ～）

Contents

医局員紹介 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
研究員紹介 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7
秘書紹介 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 10
業績紹介 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 11
編集後記 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 12

医局員紹介

坂口　浩樹
（さかぐち　ひろき）

私は肝癌に対する内科的治療、特に内科的局所療法（最近ではラジオ波凝固療法）を中心に仕事をしてきました。特に腹腔鏡的熱凝固療法に関しては、国内では自治医科大学に次いで二番目の症例数を有しています。腹腔鏡的熱凝固療法は経皮的熱凝固療法に比べると、直視下に肝に電極を穿刺し凝固する事ができるという利点があります。従って、肝表面に存在する腫瘍や、他臓器に接する腫瘍でも、腹腔鏡を用いれば、安全かつ確実に治療できます。このため、積極的に腹腔鏡的治療を進め、またその有用性について報告してきました。ところが、内科で腹腔鏡的治療を施行する施設が少なくなってきたため、この分野は行き詰ってきた感があります。腹腔鏡的治療を進めようにも、追随してくれる施設がない状況で、さらには腹腔鏡自身症例数が少なくなり、今後の発展が期待できる状況ではないと思われます。せめて大学ぐらいは腹腔鏡を続けていかないとと考え、何とか続けているところです。腹腔鏡は外科医の手に移りつつありますが、内科医の目を持つ人を残す必要があると考えられますので、今後どう腹腔鏡を伝えていくか思案しています。以上、少し暗い話になりましたが、肝癌の内科的治療ではソラフェニブが保険適応となり、治療の選択肢が増えました。現在はまだ内科的治療との組み合わせは難しい状況ですが、今後は組み合わせが可能になると思いますので、この分野はさらなる発展が期待できると思います。ソラフェニブ以外の分子標的治療薬もどんどん開発が進んでいるようですし、当科でも新しい分子標的治療薬の治験を施行する予定です。

大阪市立大学大学院医学研究科
肝胆膵病態内科学　准教授
大阪市立大学医学部附属病院
肝胆膵内科　副部長

日本内科学会地方会評議員
日本消化器病学会評議員
日本消化器病学会近畿支部評議員
日本消化器内視鏡学会評議員
日本肝臓学会西部会評議員
日本肝癌研究会幹事

日本内科学会総合内科専門医
日本消化器病学会専門医・指導医
日本消化器内視鏡学会専門医・指導医
日本肝臓学会専門医・指導医

田守　昭博
（たもり　あきひろ）

新年度を迎え、新たなスタッフとともに肝胆膵内科の活動が開始致しました。昨今の医師不足に代表される医療体制の厳しい現実は、大学病院も例外ではありません。経営上の赤字克服が大学病院の最優先課題として取り上げられ、研究面をリードすべき本来の使命が置き去りにされつつもあります。その中で昨年、肝疾患診療連携拠点病院として地域の肝疾患診療をリードする様に公に指示されたことは、肝胆膵内科の一員として大きな自信となりました。河田教授を中心にウイルス肝炎対策を初め、種々な取り組みが企画され臨床的に大きな飛躍があるものと確信しています。また私の所属する輸血部も今年度中には、血液製剤すべて（アルブミンやガンマグロビン等）を管理すべく準備を進めています。この改革にて念願の輸血管理料Ｉの取得とI&A（学会主導の輸血専門施設）の認定を目指し

医局員紹介

ています。個人的には、B型肝炎再活性化の成績をまとめ論文として報告すべく取り組んでいます。医局長3年目となりましたが、人事には悩まされる日々です。何よりもスタッフ増員が今年も変わらぬ目標です。どうぞご協力をお願い致します。

大阪市立大学大学院医学研究科
肝胆膵病態内科学　准教授
大阪市立大学医学部附属病院
中央部門　輸血部　副部長

日本内科学会地方会評議員
日本消化器病学会評議員
日本消化器病学会近畿地区地方会評議員
日本肝臓学会評議員
日本肝臓学会西部会評議員
日本輸血細胞治療学会近畿支部評議員

日本内科学会認定医
日本消化器病学会専門医・指導医
日本肝臓学会専門医・指導医
日本消化器内視鏡学会指導医・認定専門医
日本輸血細胞治療学会専門医
日本医師会認定産業医

大阪府肝炎治療医療費援助事業審査医（2008～）
大阪府国民健康保険診療報酬
審査委員会委員（2006～）

榎本　大
（えのもと　まさる）

平成20年度から大阪社会医療センターに出向中で、センターと大学を行ったり来たりの忙しい毎日を送っています。昨今のいわゆる「派遣切り」の問題以来、センターの受診者は急増しており、社会の変化をリアルに感じる今日この頃です。

以前から社会医療センターには肝疾患が多いことが知られていましたが、山口康徳先生と過去3年間の入院患者さんを集計したところ、約20%がHCV抗体陽性であることが分かりました。また常習飲酒者も多く肝硬変や肝癌の患者さんが毎日のように入院して来られますが、手術や血管造影の必要な場合には関連施設にお願いしています。日頃お世話になっている同門の先生方にはこの場をお借りして深謝致します。一方、センターでも東芝のXarioを導入し、最近では造影エコーやラジオ波を積極的に行っています。IFNに関しては精神疾患やアルコール依存症のため適応にならない方も多いですが、常に10例前後の治療を行っています。大学病院の外来も継続して担当していますので、宜しくお願い致します。

大阪市立大学大学院医学研究科
肝胆膵病態内科学　講師

日本肝臓学会西部会評議員
日本消化器病学会近畿地区地方会評議員
日本消化器内視鏡学会近畿地区地方会評議員

日本内科学会認定内科医
日本肝臓学会専門医
日本消化器病学会専門医
日本消化器内視鏡学会専門医

森川　浩安
（もりかわ　ひろやす）

大学医局に復帰後2年が過ぎました。外来、病棟、臨床研究、NST、BSL（学生実習）、講義、会議、雑用等とめまぐるしく1日が過ぎていきます。私生活では家庭をもち、益々充実の日々と言いたいところですが、努力不足のせいか、仕事、プライベート共に至らないところが多いのが実状です。

学生や様々なコワーカーとの仕事は日々新鮮でかつ驚きを与えてくれます。いわば大学での仕事の特徴、特権といえます。エコーなどは

医局員紹介

学生に解剖学的に教えるようになってからは以前より自分自身が15年目でもうまくなったような気がします。ヒトに伝える、教えるということは、どこまで自分がその物事を理解し、精通しているかを改めて考えさせます。これまでは、周囲に刺激を受けながら仕事を続けていましたが、そろそろ、私が周囲に刺激を与えるような存在にならねばと痛感しております。今後は、肝硬変の診断、治療、メカニズムに主軸を置き、フィールドを問わず、挑戦し続けていきたいと考えております。

大阪市立大学大学院医学研究科
肝胆膵病態内科学　講師

日本消化器病学会近畿支部評議員

日本内科学会認定医、指導医
日本消化器病学会専門医
日本肝臓学会専門医
日本がん治療認定医機構　がん治療認定医
日本医師会認定産業医

岩井　秀司
(いわい　しゅうじ)

このHepatology Newsを書くのは二回目になります。現在、大学では肝癌治療をメインに臨床に携わっています。局所療法についてはラジオ波焼灼術が肝癌治療のスタンダードと認識されています。当科では通常の経皮的治療に加え、特殊な肝癌には腹腔鏡下及び人工胸腹水下でのアプローチも施行しています。これらをさらにアピールすると共に、一度当科でのきちんとした成績も出さなくてはと思っています。また、新薬としてNexavar(ソラフェニブ)が登場しました。進行肝癌に対して大きな期待が寄せられています。

大阪市立大学大学院医学研究科
肝胆膵病態内科学　講師

日本内科学会専門医
日本肝臓学会専門医

小林　佐和子
(こばやし　さわこ)

私が今、力をいれて取り組んでいることは、超音波検査と肝臓病教室です。

超音波検査のなかでは、特にソナゾイド造影超音波を中心として行っています。導入直後はほぼ手探りの状態でほそぼそと行っていましたが、現在では診断や治療法検討、エコー下生検や治療時の補助、治療効果判定など、活躍の場も徐々に広がってきました。症例数も370例を超え、今後はさらにその有用性を確立させ、あらたな役割を探っていきたいと考えています。

肝臓病教室については、看護師さん、薬剤師さん、栄養士さんたちと協力しながら、今年3月に第1回目を開くことができました。内容は、慢性肝炎のインターフェロン治療についてでしたが、活発な質疑応答もあり、予想以上の手応えを得ることができました。第2回目は6月26日、肝硬変について、を予定しております。理学療法士さんや、音楽療法士さんの参加も検討しており、さらに発展させながら続けていくことが目標です。

大阪市立大学大学院医学研究科
肝胆膵病態内科学　病院講師

日本内科学会認定内科医

医局員紹介

黒岡　浩子
（くろおか　ひろこ）

今年4月より後期研究医として大学勤務しております。私自身、大学勤務は9年ぶりです。関連病院（ベルランド病院・多根病院・朋愛病院）にて5年間勤務後、大学院へと進みました。大学院では核医学を専攻し、塩見教授のもとで、肝臓・腫瘍核医学を中心に勉強する事ができましたので、これからの臨床にいかしていきたいと思います。

4月からは外来も始まり、5月から入退院の管理を行っています。病棟では肝腫瘍や慢性肝炎を中心に臨床に携わっており、今後も肝臓専門医として日々知識の向上に努めていきたいと思っています。

大阪市立大学大学院医学研究科
肝胆膵病態内科学　後期研究医

日本内科学会認定医
日本消化器病学会専門医
日本消化器内視鏡学会専門医

藤井　英樹
（ふじい　ひでき）

早いもので、大学院卒業後5年目になります。私は卒後一貫して【非アルコール性脂肪肝；Non-alcoholic steatohepatitis(NASH)の病態の解明】をテーマに研究活動を行っております。当教室は【肝線維化のメカニズムの解明】を研究目標の1つに掲げておりますので、私の研究目標も【NASHにおける肝線維化のメカニズムの解明】になります。これまでなかなか仕事を形にすることが出来なかったのですが、最近臨床研究の論文が受理されましたのでご報告いたします。以前より、C型慢性肝炎において採血データのみで簡便に肝線維化の進展度を予測する試みが行われております。実は、NASHの肝線維化もC型慢性肝炎の予測式を流用することである程度予測可能なのです（Fujii H, et al. J Gastroenterol 2009）。また、近年NASH専用の線維化予測式が多く報告されています。しかしそれらの多くは欧米人用であり、日本人には適さないことが分かりました。日本人には日本人向けの、よりよい予測式があるはずなのです（Fujii H et al. Gut 2009）。

さて、NASHの臨床については金曜日のNASH外来にて症例を集積しつつ、瀉血を含む治療を積極的に行っておりますので、NASHが疑う症例がありましたらいつでもご紹介頂ければ幸いです。宜しくお願いいたします。

一方、基礎研究としてはNASHの肝線維化進展におけるマクロファージの役割を明らかにする研究を行っております。まだまだ論文になるほどのデータは揃っていませんが、引き続きデータの集積に努めてまいります。

このように、私はNASH命で研究を続けてまいります。NASHといえば藤井、藤井といえばNASHということで、本年も宜しくお願い申し上げます。

大阪市立大学大学院医学研究科
肝胆膵病態内科学　後期臨床研究医

日本内科学会専門医

林　健博
（はやし　たけひろ）

平成13年に大阪市立大学を卒業し、早くも9年が経過しました。その間、いろいろな病院にて臨床経験を積みながら、大学院生として少しですが研究もしました。大学院

医局員紹介

卒業後は市大病院に勤務し、今年で２年目です。大学は一般病院と違い仕事内容、疾患等いろいろな面で特殊なことがあり、昨年は困惑することも多かったのですが、今年に入りようやく慣れてきました。しかし、大学院生でしばらく肝臓疾患の検査、治療から離れていたので、日々、経験を積む毎日です。まだまだ未熟者ですが、患者様を第一に考え、診療に努めていきたいです。

大阪市立大学大学院医学研究科
肝胆膵病態内科学　後期研究医

日本内科学会認定医
日本消化器病学会専門医

麻植　愛
（おえ　あい）

今年で医者になって10年になります。この５～６年間は核医学の大学院（大学院中に二度の出産）、主人のアメリカ留学への同行と、医者になって半分以上は肝胆膵内科を離れていました。アメリカで同境遇の日本人の女医さん達の刺激を受け、改めて肝胆膵内科で仕事をしたいと思い、４月から復帰させていただきました。大学の病棟は９年ぶりで、医療もかなり進歩しており、とまどいがありますが、スタッフの先生方や皆さんに優しくフォローしていただき、楽しく刺激的な毎日を送っています。核医学で、塩見教授から画像診断をはじめとし多岐にわたりご指導していただいた経験を生かしながら、勉学に励み、患者さんによりよい医療を提供してきたいと思っております。

大阪市立大学大学院医学研究科
肝胆膵病態内科学　前期研究医

内科認定医
産業医

中屋　美香
（なかや　みか）

現在大学院３年に在籍しています。大学院生の生活も半ばが過ぎ、今年度より研究発表など院生らしい仕事にウエイトをおいている日々です。

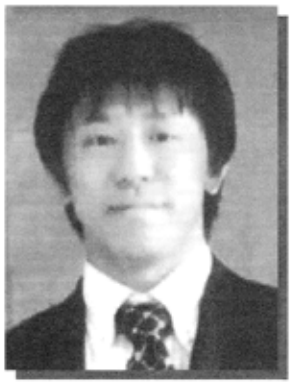
入局してから今まで様々な関連病院や大学病院での臨床経験をさせていただき、今後その臨床現場に活かせることができればという思いで現在はＣ型肝炎の臨床研究に取り組んでいます。

初めてのことでもありなかなか難しい点も多く難渋していますが、より深く勉強するよい機会なのでしっかり取り組んでいこうと考えております。

大学病院におりますと最新の情報に触れることができ、これからも様々なトピックに携われることと思いますが、専門知識をさらに深めていけるよう精進して参りたいと思います。

大阪市立大学大学院医学研究科
肝胆膵病態内科学　大学院生

元山　宏行
（もとやま　ひろゆき）



現在、肝胆膵病態内科学大学院２年生の元山宏行です。基礎研究をはじめてまだまだ日は浅いですが、肝臓という臓器内で起こっている炎症、線維化について動物を用いて解析を行っています。これまで臨床分野ではあまり見慣れない分野でとまどいもありますが肝胆膵領域を専門とするからには一度基礎的分野からしっかりと学ぶにはいい機会と思います。ま

医局員紹介

たその結果が臨床へもフィードバックできるようなものであればいいと思います。

今後ともよろしくお願いいたします。

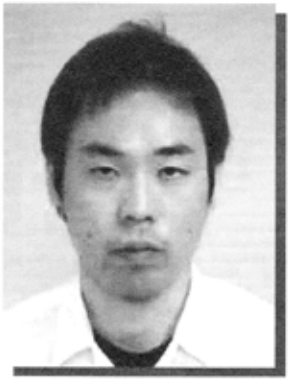
大阪市立大学大学院医学研究科
肝胆膵病態内科学　大学院生

山口　康徳
(やまぐち　やすのり)

現在の身分は肝胆膵内科学講座の大学院生です。今年で2年生となりそろそろ本腰をいれて研究もがんばらないといけないと思う今日この頃です。研究テーマはC型肝炎ウィルスの治療法についてで田守先生に御指導していただいております。また、今年度は大学病院での勤務となり毎日忙しいながらも充実した日々を過ごしております。まだまだ未熟であるため河田先生をはじめ大学の先生方、OB、関連病院の先生方には御迷惑をおかけすることもあるかと思いますが今後とも御指導の程よろしくお願いいたします。

大阪市立大学大学院医学研究科
肝胆膵病態内科学　大学院生

小塚　立蔵
(こづか　りつぞう)



本年度より大阪市立大学大学院医学研究科肝胆膵病態内科学大学院生となりました小塚立蔵と申します。研修医1年目は大阪市立大学医学部附属病院で、2年目は府中病院で研修し、3年目に旧第3内科に入局しました。4年目からは肝胆膵内科に所属し、4・5年目は東住吉森本病院で消化器内科医として肝臓および消化管など消化器全般について、診療および超音波・内視鏡検査を勉強させていただきました。

5年目までに消化器内科医として臨床一般については一通り勉強させていただき、6年目からは肝臓について専門に勉強したく思い、当科大学院に入学させていただきました。

大学院での研究ですが、消化器内科医としての3年間の診療の中で、B型肝炎の治療について興味をもったため、B・C型肝炎などウィルス性肝炎の治療に関して研究をさせていただく予定です。大学院4年間の研究の中で、ウィルス性肝炎についてさらに深く勉強し、今後の診療に役立てたく思います。今後とも御指導の程よろしくお願いします。

大阪市立大学大学院医学研究科
肝胆膵病態内科学　大学院生

研究員紹介

小川　智弘
(おがわ　ともひろ)

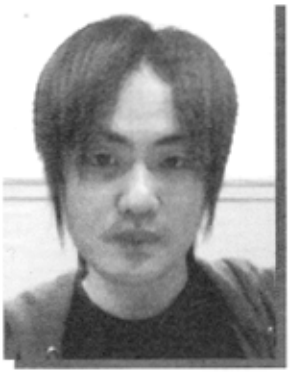
私は、現在ウイルス肝炎研究財団のリサーチ・レジデントとして、肝胆膵内科研究室で肝臓の星細胞と線維化に関する研究を行なっています。私は、大学院生の頃から星細胞に興味を持ち、線維化の研究を行なっていました。星細胞に関する研究は河田教授の専門分野で、大学院生の頃には共同研究をする機会も得ました。現在は、河田教授のもと実験動物や培養細胞を用いて星細胞の活性化機構や肝臓病態に関する基礎研究を行っています。現在の研究テーマは星細胞の発現するマイクロRNA(non-coding RNA)の機能解析と、ウサギを用いて非アルコール性脂肪性肝炎（NASH）

研究員紹介

発症する動物モデルを作製し、その病態解析です。研究室では、臨床の先生とともに基礎と臨床を結びつけた研究に取り組んでいます。実験に不慣れな臨床の先生に対しては私たちでサポートできる体制をとり、私たちは臨床の先生とともに病態の治療法の開発に取り組んでいます。今後、研究室では肝疾患の最近のトピックスであるNASHの病態解析や治療法の開発、そしてiPS細胞を用いた再生医療にも取り組む予定です。

ウィルス肝炎研究財団　リサーチ・レジデント

飯塚　昌司
（いいづか　まさし）



今年の4月より南館の研究室に赴任しました。こちらの研究室に赴任する前は、広島で、産学官連携のプロジェクトに参加後、バイオベンチャーに所属し、トランスジェニックカイコを用いた組換えタンパク質の生産系の開発を行ってきました。カイコの繭に組換え緑色蛍光タンパク質やほ乳類由来の抗体などを発現させ、組換えタンパク質の発現メカニズムの解明、および、機能解析を行いました。本研究室におきましては、「インターフェロンの抗肝線維化分子機構の解明とその応用」のテーマで、研究を行っていく予定です。インターフェロンにより誘導される遺伝子の挙動を解析し、抗肝線維化のメカニズムを解き明かしたいと思っています。また、そこから得られた知見より、抗肝繊維化に関する新しい治療法が確立できれば、素晴らしいと思います。新しい分野の知識を深めながら、これまでの経験から学んだ知識、技術を活かしていきたいと思っています。

ポスドク研究員

森　真美
（もり　まみ）

2006年からウイルス性肝疾患を中心に入院・外来の患者登録を行い、これらの疾患に対して現在行われているインターフェロン治療や核酸アナログによる治療効果を追跡調査しています。本業務に取り組む以上、知識を深め、学会発表や論文として世に公表することを日々の目標にしたく、本専攻での就学を志望しました。特に、大阪市立大学病院にて核酸アナログ治療を実施したB型肝炎患者を対象として抗ウイルス効果を調査し、ウイルス排除群と非排除群の臨床的特徴や予後について明らかにしていくとともに、肝線維化の進展を非侵襲的に評価する方法の研究にも取り組んでいます。治療効果を追跡することに加え、効果に寄与する因子を単変量あるいは多変量解析することで、より効果的に治癒促進因子を解明する可能性があります。また、治癒不可能な患者群の特徴を具体化し、治療を開始する患者の選別にも利用できることから、医療経済的効果も期待できる研究にしたいと思います。

大阪市立大学大学院医学研究科
医科学専攻　修士課程在籍中
研究補佐

Le Thi Thanh Thuy
（レイ　チイ　タン　トゥイ）

I am Le Thi Thanh Thuy from Vietnam. I have been in Japan since October 2002. I have PhD degree awarded in March 2007, at the Department of Radiation Biology and Medical Genetics, Graduate

研究員紹介

School of Medicine, Osaka University. I had worked there as a specially researcher until January 2008.

I have been interested in liver diseases such as viral hepatitis, cirrhosis or hepatocellular carcinoma, etc, since I was a student at Hanoi Medical University, Vietnam. In Vietnam, hepatitis B virus (HBV) infection is a serious health problem with the number of chronic HBV infection increased from 6.4 million cases in 1990 to around 8.4 million cases in 2005 (more than 10% in population). This is an expanding burden of liver disease which Vietnam, a poor country, has to cope with.

It has been only 6 months since I began to work at this department (from January, 2009) but I realized an active and professional working environment here. All clinical records, patients' information, diagnosis, and analysis of imaging results such as CT scan, MRI, angiography, etc, are carried out with computer-aid. It is still a wish for our Vietnamese doctors. Working here is my big chance to learn all advanced method of diagnosis as well as treatment in liver diseases such as laparoscopy treatment, radiofrequency ablation therapy, ultrasonic technology, the technology of liver biopsy under ultrasound guidance, percutaneous ethanol injection therapy, clinical skills, etc. Moreover, in the laboratory of this department there are new and "hot" researches carrying out here. Those are B, C virus dynamics and genomic analysis; liver cancer and viral DNA integrated human genes; global analysis of protein gene-related liver fibrosis; development of gene therapy for liver fibrosis using adenovirus; analysis of the clinical condition for non-alcoholic steatohepatitis, etc. I hope I can archive some important results in research field and also in clinical skills while I am working here. I will do my best!

Thank you very much Prof. Kawada and his colleagues for all their help as from my first working days.

ポスドク研究員

關谷　由美子
（せきや　ゆみこ）

今年度の4月より共同研究の関係で東レ株式会社医薬研究所から学外研究員として派遣され、南館の研究室に在籍しています。鎌倉にある東レの医薬研究所の敷地内には緑地や池などもあり、春には桜、初夏には紫陽花、秋には紅葉といった四季折々の自然を楽しむことができます。そんな環境の中、一つでも多くの薬を世に出すべく従業員一同日々研究に励んでいます。私はこれまでは主に腎疾患治療薬、糖尿病治療薬、およびインターフェロンに関する研究に携わってきました。大阪市立大学での研究テーマは「インターフェロンの抗肝線維化分子機構の解明とその応用」です。肝臓についての研究は初めてですが、これまでに携わってきた研究領域と関連する部分も多々あり、知識・技術を生かして新たな現象の解明に取り組んでいきたいと考えています。研究内容自体は基礎の基礎という感じですが、将来の治療法・治療薬に結びついていくことを期待して研究しています。

大阪市立大学大学院医学研究科
肝胆膵病態内科学　学外研究員
（東レ株式会社医薬研究所創薬薬理研究室　室員）

木綿　しのぶ
（もめん　しのぶ）

東レ株式会社より学外研究員としてこの春から医学研究科肝胆膵病態内科学にお世話になっております。東レの基礎研究所は鎌倉にあり、敷地内は緑が豊かで、リスも

研究員紹介

出たりする過ごしやすい所です。その敷地内にある医薬研究所にて、こちらに来る前はインターフェロンの種類によるうつ発症頻度の違いについて、作用機序の研究などをしておりました。

こちらではiPS細胞から肝細胞への分化誘導という、いままで全く経験のなかった研究に携わらせていただくことになり、大きなやりがいを感じております。と同時に、競合の激しい領域であり、フットワーク軽く研究を進める必要があると実感する毎日です。こちらの研究室は学外との共同研究も多いので、外に向かう研究を学ぶ絶好の機会だと思っています。積極的に外から情報を得て、一日も早いiPS細胞の産業利用を目指し日々邁進する所存です。

大阪市立大学大学院医学研究科
肝胆膵病態内科学　学外研究員
（東レ株式会社医薬研究所創薬薬理研究室　室員）

秘書紹介

瀬田川　千恵
（せたがわ　ちえ）

昨年の3月から肝胆膵病態内科学の医局秘書としてお世話になっております、瀬田川千恵と申します。

秘書として丸1年が過ぎ、毎日楽しく働かせて頂いております。

まだまだ医局秘書として未熟な私ですが、先生方のお役に立てる様精一杯頑張りますので、これからもご指導ご鞭撻の程、何卒宜しくお願い致します。

大阪市立大学大学院医学研究科
肝胆膵病態内科学　医局秘書

髙野　由利子
（たかの　ゆりこ）

昨年8月より、河田教授秘書として勤務させていただいております。

これからも河田教授はじめ医局の先生方、研究員の方々に気持ちよく働いていただけるよう努めてまいります。

ご指導の程、よろしくお願い申し上げます。

大阪市立大学大学院医学研究科
肝胆膵病態内科学　河田教授秘書

川本　記世美
（かわもと　きよみ）

2008年9月より、肝炎防止調査センターにて勤務させていただいております。田守准教授のご指導の元、データ収集や保存検体管理など、先生方の自主研究のお手伝いをさせていただいております。

業績紹介

原発性肝癌 エンドファイア型超音波腹腔鏡を用いた、肝細胞癌に対する腹腔鏡的熱凝固療法について（原著論文／抄録あり）
Author：坂口浩樹（大阪市立大学 大学院医学研究科肝胆膵病態内科学）
藤井英樹、安田隆弘、小林佐和子、岩井秀司、森川浩安、榎本 大、田守昭博、河田則文、関 守一
Journal of Microwave Surgery(0917-7728)26 巻 Page85-88(2008.08)

原発性肝癌 横隔膜直下の肝癌に対するラジオ波焼灼療法の工夫（原著論文／抄録あり）
Author：岩井秀司（大阪市立大学 大学院医学研究科肝胆膵病態内科学）
坂口浩樹、安田隆弘、藤井英樹、森川浩安、榎本 大、田守昭博、河田則文
Journal of Microwave Surgery(0917-7728)26 巻 Page63-65(2008.08)

防風通聖散による薬物性肝障害の１例（原著論文／症例報告／抄録あり）
Author：元山宏行（大阪市立大学 大学院医学研究科肝胆膵病態内科学）
榎本 大、安田隆弘、藤井英樹、小林佐和子、岩井秀司、森川浩安、武田 正、田守昭博、坂口浩樹、河田則文
日本消化器病学会雑誌（0446-6586)105 巻 8 号 Page1234-1239(2008.08)

遡及調査にて判明した輸血後Ｂ型肝炎ウイルス感染の１例（原著論文／症例報告／抄録あり）
Author：田守昭博（大阪市立大学医学部附属病院 輸血部）
藤野恵三、尾嶋成子、武田和弘、河田則文、日野雅之、西口修平
日本輸血細胞治療学会誌（1881-3011)54 巻 3 号 Page393-397(2008.06)

大阪市におけるＣ型肝炎ウイルス検診と肝炎フォローアップ事業の検討（原著論文／抄録あり）
Author：松本健二（大阪市旭区保健福祉センター）
高橋峰子、田守昭博、西口修平
日本公衆衛生雑誌（0546-1766)55 巻 2 号 Page75-82(2008.02)

Focal nodular hyperplasia-like lesion with venous washout in alcoholic liver cirrhosis.
Kim SR, Imoto S, Ikawa H, Ando K, Mita K, Shimizu K, Taniguchi M, Sasase N, Matsuoka T, Kudo M, Kawada N, Hayashi Y.
Intern Med. 2008;47(21):1899-903.

[Drug-induced liver injury caused by an herbal medicine, bofu-tsu-sho-san]
Motoyama H, Enomoto M, Yasuda T, Fujii H, Kobayashi S, Iwai S, Morikawa H, Takeda T, Tamori A, Sakaguchi H, Kawada N.
Nippon Shokakibyo Gakkai Zasshi. 2008 Aug;105(8):1234-9. Review. Japanese.

Platelet-associated IgG for the diagnosis of immune thrombocytopaenic purpura during peginterferon alpha and ribavirin treatment for chronic hepatitis C.
Enomoto M, Yamane T, Hino M, Ohnishi M, Tamori A, Kawada N.
Liver Int. 2008 Nov;28(9):1314-5.

Clinical role of FDG-PET for HCC: relationship of glucose metabolic indicator to Japan Integrated Staging (JIS) score.
Kawamura E, Habu D, Ohfuji S, Fukushima W, Enomoto M, Torii K, Kawabe J, Kondo K, Tamori A, Kawada N, Shiomi S.
Hepatogastroenterology. 2008 Mar-Apr;55(82-83):582-6.

Usefulness of a new immunoradiometric assay of HCV core antigen to predict virological response during PEG-IFN/RBV combination therapy for chronic hepatitis with high viral load of serum HCV RNA genotype 1b.
Sasase N, Kim SR, Kim KI, Taniguchi M, Imoto S, Mita K, Hotta H, Shouji I, El-Shamy A, Kawada N, Kudo M, Hayashi Y.
Intervirology. 2008;51 Suppl 1:70-5.

Does a late evening meal reduce the risk of hepatocellular carcinoma among patients with chronic hepatitis C?
Ohfuji S, Fukushima W, Tanaka T, Habu D, Takeda T, Tamori A, Sakaguchi H, Seki S, Kawada N, Nishiguchi S, Shiomi S, Hirota Y.
Hepatol Res. 2008 Sep;38(9):860-8.

Optimal duration of additional therapy after biochemical and virological responses to lamivudine in patients with HBeAg-negative chronic hepatitis B: a randomized trial.
Enomoto M, Tamori A, Kohmoto MT, Hayashi T, Morikawa H, Jomura H, Sakaguchi H, Habu D, Kawada N, Shiomi S, Nishiguchi S.
Hepatol Res. 2008 Sep;38(9):954-9.

Attenuation of acute and chronic liver injury in rats by iron-deficient diet.
Otogawa K, Ogawa T, Shiga R, Nakatani K, Ikeda K, Nakajima Y, Kawada N.
Am J Physiol Regul Integr Comp Physiol. 2008 Feb;294(2):R311-20.

Hepatocellular carcinoma (HCC) recurring 10 years after clearance of hepatitis B surface antigen and 20 years after resection of hepatitis B virus-related HCC.
Shinkawa H, Nakai T, Tamori A, Tanaka H, Takemura S, Ohba K, Uenishi T, Ogawa M, Yamamoto S, Hai S, Ichikawa T, Kodai S, Hirohashi K, Wakasa K, Kubo S.
Int J Clin Oncol. 2008 Dec;13(6):562-6.

[Present status of community-based HCV screening in Osaka City and evaluation of the utility of follow-up programs on hepatitis]
Matsumoto K, Takahashi M, Tamori A, Nishiguchi S.
Nippon Koshu Eisei Zasshi. 2008 Feb;55(2):75-82. Japanese.

Serial changes in expression of functionally clustered genes in progression of liver fibrosis in hepatitis C patients.
Takahara Y, Takahashi M, Zhang QW, Wagatsuma H, Mori M, Tamori A, Shiomi S, Nishiguchi S.
World J Gastroenterol. 2008 Apr 7;14(13):2010-22.

PTPRC (CD45) variation and disease association studied using single nucleotide polymorphism tagging.
Hennig BJ, Fry AE, Hirai K, Tahara H, Tamori A, Moller M, Hopkin J, Hill AV, Bodmer W, Beverley P, Tchilian E.
Tissue Antigens. 2008 May;71(5):458-63.

Endoscopic thermal ablation therapies for hepatocellular carcinoma: a multi-center study.
Hiroki Sakaguchi, Shuichi Seki, Kunihiko Tsuji, Kenichi Teramoto, Masatoshi Suzuki, Kiyohide Kioka, Norio Isoda, Kenichi Ido.
Hepatology Res 2009; 39:47-52

編集後記

今夏も暑くなりそうです。本号では、若手の爽快な風を感じていただければ、と思っております。

（森川浩安）

HEPATOLOGY NEWS
肝胆膵病態内科学ニュース
第6号　2009年7月　発行

発行者／大阪市立大学大学院医学研究科
肝胆膵病態内科学
〒545-8585　大阪市阿倍野区旭町 1-4-3
TEL：06-6645-3811　FAX：06-6645-3813
編集委員／森川浩安